

「それはよかったですね。でも、このごほうびはこの母にくださったほうがよかったですのではないですか。」

母はうれしきのあまりに、じょうだんを言ったのだが、それにはわけがあった。

健次郎が病気で何日も学校を休んでいる

間、母は健次郎を看病かんびょうしながら、その枕まくら

もとにすわって毎日のように、学校で習

っている本を読んで聞かせていたのであ

る。健次郎も、母のおかげできょうのよ

うなよい成績せいせきがとれたのだと感謝し、こ

の恩おんは、一生忘れまいと思っていた。健

